

天親・龍樹の内鑑冷然に就て

塩 田 義 遜

由來天親・龍樹内鑑冷然の語は、摩訶止觀五に出づるもので、随つて天台の法華義たる一念三千に就ての批判の語であるが、後宗祖も遺文中に盛んに用いられ、天台の理觀に對する批判を超えて、宗祖の本門事觀に對する批判として転用せらるゝに至つたのである。故に今は先づ宗祖の事觀に對す意を述べて、後に天台義に觸れて見たい。

龍樹(一七〇—二七〇)・天親(三二〇—四〇〇)は共に印度出生の論師で、他の馬鳴・提婆・堅慧・弥勒・無着等の諸論師の、粗ぼ前後に出生せる二論師である。是等の諸論中龍樹の大智度論、堅慧の入大乘論、弥勒の宝性論註偈、天親の法華論は勿論仏性論等にも法華經の名は見えるが、弥勒の莊嚴論、無着の攝大乘論等にも「究竟說一乘」として法華を指していることは、天親の攝大乘論釈に依て明かである。随つて宗祖の遺文中には是等の論師に就て、法華に關連して記述せられた所も少なくないが、就中龍樹・天親に就ては法華義に對する、内鑑冷然の論師として随處に記述せられている。かく二論師が特に重視せらるゝことは、龍樹は大論に法華を以て般若經に勝るゝ、變毒為藥の秘密教と歎じ、天親は印度に於ける唯一の釈論を残されたるに由來するのであらう。

龍樹は又別に龍猛・龍勝とも呼んだが、遺文中には龍勝の名は見えぬが、龍猛の名は昭和定本遺文正篇二卷中、龍樹の粗ぼ七十位に対して約一割位で、真言関係の場合に多く用いられている。天親は旧訳で新訳では世親と呼ぶが世親は遺文中天親の粗ぼ四十位の約二割位が、法相宗関係の場合に多く用いられている。随つて遺文中には龍樹・龍猛天親・世親の両名は混用せられて居るが、多くは龍樹・天親が用いられて居るのである。

次に遺文中両論師の出世年代に就ては、多く摩耶經に依られた様であるが、守護國家論には龍樹は六百一年^(五六〇)、唱題鈔には龍樹・天親は九百年^(二〇三)、報恩鈔には馬鳴は六百年、龍樹は七百年^(二二五)、開目鈔には龍樹は六百一年^(五六〇)、唱題鈔には龍樹・天親は仏滅五百年乃至九百年の間に出世^(二〇七)すとも述べられている。両論師出世年代は諸經論の説まち／＼であるが、龍樹は粗ぼ六百年、天親は粗ぼ八百年頃の出世とする。又両論師の相承に就ては、撰時鈔には付法藏因縁伝に依り、釈尊より師子尊者に至る中間第十三祖に龍樹を挙げ、^(二〇〇)星名五郎太郎殿御返事には天親をも付法藏の中に加えて、師子尊者に次ぐ最後第廿四祖^(二〇二)に列している。更に法華内証佛法血脈には、止観一の付法藏に依る金口相承の外に、第十三祖の龍樹を天台の高祖とし、龍樹・慧文・南岳・天台の今師相承を挙げ、更に右の両相承に順して我が内外相承が述べられている^(六九三)。右両論師の中龍樹は古來三論・真言・淨土等に於ても、皆祖と仰ぐ故に八宗の祖と呼ばれている。今此に述べんとする天親・龍樹内鑑冷然は、我が内外相承に準ずる広義に於ける法華鑽仰の師と仰ぐものである。

二

かゝる両論師の著述に就ては、大正大藏經には共に二十部前後の論が見えるが、遺文中に見る龍樹の著としては大

論・中論・十二門論・菩提資量論・十住毗婆沙論・釈摩訶衍論・菩提心論等で、天親の著としては俱舍論・唯識論・十地論・摂大乘釈論・仏性論・法華論等であるが、守護国家論には、共に千部の論師を讃え、龍樹は「造十住毗婆沙論一宣華嚴・方等・般若等意」、最後造ニ大論二分ニ般若・法華差別」。「天親は「造ニ俱舍論一宣ニ小乘意」、造ニ唯識論一宣ニ方等部意」。最後造ニ仏性論一宣ニ法華・涅槃意」(一〇三)とも、唱題鈔には、天親菩薩先小乘説一切有部の人、俱舍論を造つて阿含十二年の経の意を宣べ、一向に大乘の義理を明さず。次に十地論・摂大乘釈論等を造て、四十余年の権大乘の心を宣べ、後に仏性論・法華論等を造りて、粗ぼ実大乘の義を宣べたり。龍樹菩薩亦然也」(一〇四)等と述べ。更に撰時鈔には、龍樹・天親は「華嚴・方等・般若・大日経等の権大乘、顕密の諸経をのべさせ給いて、法華経の法門をば宣べさせ給わず。漢土にわたれる十住毘婆沙論・中論・大論等をもって、天竺の論を比知して此れを知るなり。乃至中論の因縁所生法の四句の偈は、華嚴・般若等四教三諦の法門なり。いまだ法華開会の三諦をば宣べ給はず」(一〇五)等と述べられる。

就中宗祖一代の所破は佐前浄土、佐後真言破を中心とする故に、龍樹の十住毗婆沙論第五の易行品第九に

仏法有ニ無量門一、如ニ世間道有、難有レ易、陸道歩行則苦、水道乘船則楽一、菩薩道亦如レ是、(正藏三六四)

等と仏法に難易二行あることを説き、又天親に浄土論あるより、浄土門に於ては龍樹・天親を共に相承の師と仰ぐ故に、当世念仏者無間地獄事には法然選択集の捨閉闍地の四字は、曇鸞・道綽・善導の三師の釈より出で、三師の釈は「源自ニ浄土三部経・龍樹菩薩十住毗婆沙論一出」(三三三)と述べ、守護国家論には「十住毗婆沙論於ニ法華已前二分ニ難易二行一、敢於ニ四十余年以後経ニ不レ存ニ難行之義一。其上若以レ易レ修定ニ易行一、法華經五十展転之行、自ニ称名念仏一易レ行百千万億倍也」(一〇六)等と権教の易行たる念仏より、法華実経の唱題行は更に易行なりと述べ、妙密上人御消息には

馬鳴・龍樹・天親の弘通に就て「いまだ法華の題目をば弥陀名号の如く勤められず」(二六四)等とも述べられて、十住毗婆沙論を以て念仏易行の典拠として折破している。

併し聖愚問答鈔等には矢張十住毗婆沙論の第七分別法施品第十三に

不智者若行_レ法施_レ即說_レ黒論_一、說_レ黒論_一故自失_レ利亦失_レ他利_一。乃至從_レ今日_レ後依_レ修多羅_レ莫_レ依_レ人、是故言_レ智者不_レ依_レ黒論_一而行_中清白法施_上(正藏、二六五)

等とあるより、修多羅に白黒の別を分ち、爾前諸經を以て悉く黒論となし、遺文中には「法華已前の權教をすて、此經につけよと也」(二六六)等と、隨處に法華を以て修多羅白論と述べられている。又菩提資量論に就ては富木殿御返事に、五無間業の典拠としてこれを挙げ(二七〇)。若し釈摩訶衍論に就ては今日は起信論を演訳せる支那撰述の説さえ見るが、宗祖は龍樹の造論となし、殊に真言の弘法が秘藏宝鑰に本論並に大日經に依て、十住心教判をなし、第八の一_レ道無為心に法華を配し「如_レ是一心無明辺域非_レ明分位_一」とも、亦最後に「如_レ是乘々自乘得_レ仏名_一」後作_レ戲論_一(正藏、七三三)等と、法華を以て無明の辺域、第三戲論と判ずるより、真言天台勝劣事には「法華を無明の辺域、戲論の法と云事は以の外の事也」(四八三)等と破折せられている。

三

右の諸論の外遺文中最も多く引用せらるゝは菩提心論と大論とである。就中菩提心論には

唯真言法中即身成仏、故是說_レ三摩地法_一、於_レ諸經中_一闕不_レ書。(正藏、三三七)

等とあるに依て、真言に於て大日經並に本論を以て彼宗の即身成仏の典拠となすも、大論百に

般若波羅蜜非_三秘密法_一、而法華等諸經說_二阿羅漢受決作_一。大菩薩能受持用譬如_三大藥師能以毒為_二藥_一(正藏_二五_{四七五})
等と二乗作_一を設ける法華を以て、般若經に勝る秘密教と見ゆるより、太田殿女房御返事には

大論は龍樹の論たる事は自他あらず事なし、菩提心論は龍樹の論不空の論と、申すあらず有り。乃至大論の心
ならば即身成仏は法華經に限るべし。文と申し道理きわまれり。菩提心論が龍樹の論と申すとも、大論にそむいて
真言の即身成仏を立つる上、唯一字は強と見えて候。何の文に依て唯一字をば置て、法華經を破し候けるぞ証文を
尋ぬべし。自語相違あるべからず。大論一百云○此釈こそ即身成仏の道理はかゝれて候へ。但し菩提心論と大論と
は同じ龍樹大聖の論にて候か、水火の異をばいかんがせんと見候に、此論は龍樹の異説にはあらず、訳者の所為な
り。(二七五)

等と菩提心論の即身成仏を以て訳者の所為となし、更に上野殿御返事には提婆品の龍女の即身成仏を挙げ

文殊師利菩薩は「唯常宣說妙法華經」とこそかたらせ給へ、唯常の二字は八字の中の肝要也。菩提心論の「唯真言
法中」の唯の字と、今の唯の字といづれを本とすべきや。彼の唯の字はおそらくはあやまり也。(六三四)

等と菩提心論は不空造或は訳者の誤となし、殊に大論に対して自語相違の論等と述べられているが、現に大正藏にも
作者なく、単に不空訳とのみあるに徴しても龍樹の論にあらざること明かである。

されば宗祖は大論に依り即身成仏は法華に限るとなし。妙一尼御返事には更に筆を我が上古天台の慈覚・智証・安
然に向け、就中慈覚が一行の大日經疏に習って金蘇二經の疏各七卷を著し、蘇悉地經疏に於て法華天台は理密、真言
は事理俱密と判ぜるに對し、三人は「佗教の山に栖むといえども、其義は弘法東寺の心なり」(二七七)と判じ、後の妙
一尼御返事には更に慈覚の法華理密、真言俱密の意を法華迹本二門の即身成仏の上に置換し

法華經の即身成仏に二種あり、迹門は理具本門は事の即身成仏也。今本門の即身成仏は当位即妙・本有不改と断ずるなれば、肉身其まゝ本有無作三身如来と云える是也。此法門は一代諸經の中無レ之。(二七九八)

等と大論に依て菩提心論の即身成仏を否定するのみならず、法華迹門の意に立つ天台の即身成仏を理談となし、法華本門の即身成仏を以て、真の即身成仏たることを明にせられている。

四

されば龍樹の諸論中今の内鑑冷然の対照となるは大論といわねばならぬ。併し大論も般若の釈論としては他の諸論と共に一往権大乘と見なければならぬ。故に一代聖教大意(六六)、善無畏鈔(四三)等には、提婆の百論と共に大論・中論・十二門論を以て般若経依憑の論となし、三論宗所依の論と述べられている。その他遺文中大論の引用せらるゝは戒体即身成仏義に「大論之戒是心法」(三三)、二乗作仏事の論十の四悉坦(二五四)、十法界明因果鈔の第六天道の下の、論八の「若破三衆生眼」(二七五)、真言見聞の論九の「釈迦一仏世界」(二五五)、開目鈔(二九〇)並に本尊鈔(二二〇)の論四八の「薩者六也」等の文は、何れも般若経当分の釈というべきである。併し遺文中には佐前の守護国家論の「造二大論二分三般若・法華差別」より、佐後太田殿女房御返事に菩提心論を以て「大論の心ならば即身成仏は法華經に限るべし、乃至大論にそむいて真言の即身成仏を立つは自語相違」等の釈は、正しく上掲大論百の般若に対して法華經を、二乗作仏を説く変毒為藥の秘密法の釈こそ、宗祖が龍樹を内鑑冷然の論師と推賞せる典拠であろう。

されば佐前に於ても法華題目鈔には、右の大論の文を引き

此文は大論に法華經の妙の徳を釈する文也。妙楽大師釈云難レ治能治所以称レ妙。(二九九)

を始め、その他遺文中十余篇に此文を引き、就中建治二年の道場神守護事には「妙法蓮華經の妙の一字を釈し」(三七四)を始め、教行証御書には「此經計り成仏の種子」(四六〇)とも、諸經与法華難易事には「此經の難信難解の四字を説候しなり」(七五〇)とも、上野殿母尼御前御返事には「仏已下はたゞ信じて仏になるべし」(八二〇)等とも釈されたる所以である。又大論七二には

般若波羅蜜中、或時分三別諸法空二是淺。或時説三世間法同ニ涅槃二是深。(正藏三五六)

等と説けるは、恐らく龍樹は法華を以て般若部の經典と解し、般若の思想を抽象的に淺深に分ち、諸法実相を般若經当分に於ては、消極的に空諦実相と説けるを淺解、法華經に至つては積極的に諸法実相と説けるを深解と説き、且つかゝる深般若の意を具体的に説いたのが上掲大論百の迹門の二乗作仏を變毒為藥の説と解すべきであらう。併し變毒為藥の義を本門に求むれば、寿命品の良医段の「此大良藥色香味皆悉具足、汝等可服速除苦惱、乃至是好良藥今留在此、汝等可服勿憂不差」の説と一脈相通するものゝあることは、本尊鈔に「是好良藥寿命品肝要、名体宗用教南無妙法蓮華經是也」(七七〇)釈に徴して明かであるが、天台の一念三千と共に龍樹の内鑑の法門と解すべきである。

五

次に天親の著に就ては唱題鈔に「初め俱舍論を造て小乘を弘通し、次に無着に就て大乘に入り十地論・撰大乘釈論を造て權大乘の心を宣べ、後に仏性論・法華論等を造て粗ぼ大乘の義を宣べたり」と、天親一代弘通体系を明にせられて居るが、小乗は且く措き權大乘の中、無着の撰大乘論の真諦訳には

未定性声聞、及諸余菩薩、於大乘引攝、定性説一乘。法無我解脱、等故性不同、得二意涅槃、究竟説一乘(正藏

の文であるが、前偈の「定性説一乘」は三乗家の菩薩定性の一乗で、後偈の「究竟説一乘」は菩薩性の究竟の一乗で、玄奘訳天親の同論釈十五には「如来於_レ法華中_一為_レ其授記已得_レ仏意_レ」(正藏三_{五六})と見ゆる如く、天親は法華一仏乗の授記と解したのであるから、大論の二乗作仏の解といわるればならぬ。併し唱題鈔は撰大乘論の意に依て權大乘と述べられたのであるが、天親は龍樹同様に二乗作仏の意と解した様である。

次に遺文には仏性論・法華論を造つて、粗ぼ実大乘の意を述べたとあるが、由來天親の仏性論は堅慧の究竟一乘宝性論の十一品中、第五の一切衆生有如來藏品、第六の無量煩惱所纏品、第七の為何義品の三品を敷衍したる、謂わ_レ究竟一乘仏性論である。且つ現行の宝性論は本偈は堅慧、釈偈は弥勒、釈疏は無着の本末合糅の論といわれている。其中弥勒といわるゝ釈偈には

言_三我得_二涅槃_一、法華等諸經、皆説_二如実法_一、般若方便撰。廻_二先虚忘心_一、令_レ淳_二熟上乘_一、授_二如菩提記_一、微細大勢力、令_下愚癡衆生、過_中嶮難惡道_上。(正藏三_{三四})

等と般若を方便説となし、菩提の十地の行程を化城品の嶮難惡道に譬えるらるゝに依れば、既に弥勒にも天親と同様の法華を究竟一乗と解したことが窺われるのである。

更に天親の仏性論には最初に「仏性者即是人法二空所顯真如」(正藏三_{二七})等と、人法二空所顯の真如を仏性と解し、法華論の「実相者謂如来藏法法身之体不変故」(正藏三_{二七})の実相如来藏と同義と解さなければならぬ。故に宗祖は爾前二乗菩薩不作仏事に

抑仏以_二何因縁_一説_二十界衆生悉有_三三因仏性_一。天親菩薩仏性論縁起分第一云、如来為_下除_二五種過失_一、生_中五種切徳_上

故說一切衆生悉有仏性^二。(四七)

等と仏性論の最初(正藏三^七)の文を引き、十界の衆生に三因仏性あることを説くに、かゝる三因仏性は近くは天台の玄文等に依られたであろうが、併し仏性論第二の顯体品第三の因縁品第一に

須次仏性体有三種^一、三性所攝義^二。三種者所謂三因三種仏性。三因者一應得因、二加行因、三因滿因、乃至三種仏性^三。應得因中具有三性^一、一住自性^二、二引出性^三、三至得性。(正藏三^{四七})

等と見るが、從來天台の一念三千正了縁の三因仏性は、大涅槃經に依るといわれて居るが、併し右の天親仏性論の三因三種仏性の義に外ならないのである。これに就ては後に述べることにするが、何れにもせよ天親に法華一乘授記と三因仏性の説のあつたことは否めないのである。

六

上述の如く弥勒以来天親に般若方便の説、並に法華一乘の解のあつたことは明かである。若し果して然りとすればこれを解したのが天親の法華論といわなければならぬ。何れにもせよ同論は上述の如く、法華の実相を如来藏仏性と解し、更に同論に法華十七異名の妙法蓮華經第十六には

妙法蓮華經者有三種義^一、何等^二。一者出水義以^レ不可^レ尽^レ出^レ離小乘泥濁水^二故。又如^レ彼蓮華出^レ於泥水^一喻^上、諸声聞得^レ入^レ如来大衆中坐^二、如^レ諸菩薩坐^レ蓮華上^一、如来無上智慧清淨境界、得^レ証^レ如来深密藏^二故。二華開義以下諸衆生於^レ大衆中^一、其心法弱不能^レ生^レ信心^上。是故開^レ示如来淨妙法身^二令^レ生^レ信心^一。(正藏二^三)

等と諸衆生乃至声聞が信心を生ずることに依て、如来淨妙法身即ち成仏することを得とは、龍樹大論の二乗作仏と同

義に解せざるを得ないのである。されば天台も玄七の蓮華釈の下、右の文を引き「以妙報国土為蓮華也」(正藏三二)と釈し、宗祖は当体義鈔に又此の文を引き、天台の当体譬喩合説の妙報国土の義を以て、「次龍樹菩薩大論云蓮華者法譬並華也」(七六三)等と、法華論の蓮華釈を龍樹にまで及ぼしているのである。

随つて宗祖は法華宗内証仏法血脈には、靈山娑婆即寂光の義を述ぶるに當つて、妙楽記の九の「豈離伽耶別求寂光、非寂光外別有娑婆」(正藏四三三)等の文を引き

但正証文經論分明也、所謂法華壽量品、結經普賢經、法華論等也。而且蓮一人非感得之天台・妙楽等引此等經論文二釈二成常寂光土二給也。(八九二)

等と述べ、次に伝教大師四箇血脈相承譜の天台法華宗血脈の「常寂光土第一義諦靈山淨土久遠実成多宝塔中大牟尼尊」(伝全二五三)並に壽量品の「然我実成仏已来久遠若斯」更に「於阿僧祇劫、常在靈鷲山」の文、觀普賢經の「釈迦牟尼仏名毗盧遮那遍一切処」の文、更に法華論の

我淨土不毀。而衆見燒尽者、報身如来真実淨土第一義諦之所攝故、乃至八者同一塔坐者示現化仏非化仏報仏等皆為成大事二故(正藏二六二)

等の文を引き

諱案此等文意二釈迦如来於靈山事相之常寂光土、召出本眷屬上行菩薩二定付屬弟子、宝塔中多宝如来之前、集我十方分身之諸仏二為上証人二以結要五字二付屬之、三世諸仏不レ可レ諍之、何況菩薩二乘人天等耶、(八九二)

等と壽量品、結經、法華論を以て娑婆即寂光の証文となし、守護國家論には「法華論与法華經二相違、皆訳者人師誤也」(八九)等見ゆるも、唱題鈔に「仏性論・法華論等を造りて粗ぼ実大乘の義を宣べたり」と見ゆる如く、開目鈔には法

華論の十無上の最初の

一者示_レ現種子無上_ニ故説_ニ雨譬喩_一、汝等所行是菩薩道者、謂發_ニ菩提心_一退已還發者、前所_ニ修行_一善根不_レ滅同_ニ後得果_一故。(正藏二六二九)

の文に依り

法華の種に依て天親菩薩は種子無上を立てたり、天台の一念三千これなり。(五七九)

と述べ、更に撰時鈔には「天親菩薩は法華論を造て諸經第一の義を存す」(二〇〇)等と見ゆる如く、宗祖は是等の文に依て龍樹と共に天親を内鑑冷然の論師と述べられたる所以である。

七

由來天親、龍樹内鑑冷然の文は、天台の摩訶止觀五に往年の三諦実相説を超えて、觀不思議の心、縁、共、離、不可得の下に始めて一念三千を説き、次で地論の法性生法、撰論の無明生法の説を挙げ

天親龍樹内鑑冷然、外適_ニ時宜_一各權所_レ揆。而人師偏解學者苟執、遂興_ニ矢石_一各保_ニ一辺_一、大乘_ニ聖道_一也。(正藏四九五)

等と右の文は性相二宗の論師中天台義に親しき、天親龍樹を推賞し、併せて法性無明に偏執せる地撰二論の説を評破せる文である。然るに天台の末師中從義は三大部補註(三三三)、証真是止觀私記五末(仏全三三九)等には、内鑑冷然を釈するに當つて止觀の釈に於ける、直前の地撰二論の後を受けて、内鑑冷然を天親龍樹と作るは止觀の本文の誤となし天親無着と改むべしと述べているが、併し天台は龍樹提婆系の実相論を宗とし、且つ龍樹を高祖と仰ぐのみならず

一念三千の説は地摂二論の法性生法、無明生法を逸脱したる所謂色心双具説で、いわゞ龍樹実相論を更に積極的に説かれたる絶対的實在論である。且つ天台は玄義文句等に盛んに天親の法華論を引用して天台義を積成せるに依れば、天台の終窮究竟の極説たる一念三千実相義に対して、天親龍樹を内鑑冷然の師と仰ぐことは当然である。

随つて止観引用の次の二論師に就ては、内鑑冷然の後に「而人師偏解學者苟執、遂興_二矢石_一各保_二一辺_一」等の文こそ、地摂両論師を批判せる文といふべきである。されば止観に「内鑑冷然外適時宜」とは、天台の一念三千実相義に對する天親龍樹を指せる文なることはいふまでもない。されば本尊鈔には

但諸經与_二法華_一相違自_二經文_一事起分明。未顯与_二已顯_一、証明与_二舌相_一、二乗成不、始成与_二久成_一等顯_レ之。天台大師云天親、龍樹内鑑冷然云々、乃至夫自_二仏至_二于滅後_一一千八百年_一、經_二歷三國_一但有_二三人_一始覺_二知此正法_一。所謂月支釈尊・真且智者大師・日域伝教、此三人内典聖人也。問曰龍樹・天親如何。答曰此等聖人知而不_レ言_レ之仁也。或迹門一分宣_レ之不_レ云_二本門与_二觀心_一。或有_レ機無_レ時歟。或機時共無_レ之歟。天台伝教已後知_レ之者多々也用_二二聖智_一故也。云々

等と見ゆる如く内鑑冷然とは、法華の正法なることを「知而不_レ言_レ之仁」の意である。故に開目鈔には

迹門方便品は一念三千・二乗作仏を説て、爾前二種の失一つを脱れたり。しかりといえどもいまだ発迹顯本せざれば、まことの一念三千もあらわれず、二乗作仏も定まらず水中の月を見るがごとし。乃至本門にいたりて、爾前迹門の十界の因果を打やぶつて、本門十界の因果をとき顯す、此即本因本果の法門なり、九界も無始の仏界に具し、仏界も無始の九界に備えて、真十界互具・一念三千なるべし。(五五二)

等と見ゆる如く、法華迹本二門の開顯を判然説かざるを内鑑冷然と、天台の一念三千に對する止観の釈意を二門の開顯の上に隨義転用せられたのである。

されば天台に対して「爾前二種の失の一つを脱れたり」とも、「或迹門一分宣之不_レ云_ニ本門与_ニ觀心_」とも述べられて、天台伝教の迹門開顯の外相承を、宗祖の本門開顯の内相承に簡んで、天親龍樹の法華の釈意を内鑑冷然と述べられたのである。故に宗祖の佐後実義開顯時代と称せらるゝ佐渡第一書の富木殿御返事には

仏滅後二千二百余年に月氏・漢土・日本・一閻浮提の内に、天親・龍樹内鑑冷然外適時宣云々、天台・伝教は粗釈し給えども、弘_ニ残之_ニ二大事の秘法を此国に初て弘_レ之、日蓮豈非_ニ其人_一乎。(五二六)

を始めとして、開目鈔には、

一念三千の法門は但法華經の本門寿量品の文の底にしづめたり。龍樹・天親知てしかもいまだひろひたさず。但我が天台智者のみこれをいだけり。(五二九)

等と天台が迹門の開顯たる一念三千に対する天親・龍樹の内鑑冷然を、本門の開顯に対しても同義となし、天台の釈意を越えて本門の一秘乃至三秘に対しても、天親龍樹を内鑑冷然の師とせられたのである。

八

然らば天台の止観に見ゆる天親・龍樹の内鑑冷然とは、果して両論師の諸論中何れの文を指すやに就ては、粗ぼ宗祖遺文中引用の上掲諸文であろうが、以下少しくそれ等の文を挙ぐるならば、龍樹に対する天台の内鑑冷然に就ては、古来天台一家に中智傍正の論があり、就中三大部中止観には「中論遣蕩・止観建立」(正藏_六)の文あるに依て、天台の実相義が龍樹の大論に依れることは明かである。殊に大論三二には般若經の「欲知一切諸法、如・法性・實際」の文に

就て

問曰、如・法性・實際是等三事為一為異。若一云何說三、若三今底當分別說。答曰、是三皆諸法実相異名。(正藏三五七九)

等と空諦実相の義と述べているが、その連文に

復次一法有九種一、一者有体。二者各々有相。乃至三者諸法各有力。乃至四者諸法各自有因。五者諸法各自有縁。六者諸法各有果。七者諸法各自有性。八者諸法各有障礙。九者諸法各有開通方便。諸法生時体及余法有九事。(正藏二五九)

等と先には諸法実相を如・法性・實際に寄せて不可得空の上に説けるも、次には右の如く実相を九相に寄せて説いてゐる。されば天台は文句九に方便品の諸法実相たる十如を釈するに當つて、先づ光宅・北地師・瑤師・暢師等の釈を引き、最後に右の大論の文を引き、

達磨鬱多將此九種一會法華中十如一。各有法者即是法華中如是作。各有障礙者即是法華中如是相、各有果者即是法華中如是果如是報也。各有開通方便二者即是法華中如是本末究竟等。余者名同可解。(正藏三四二)

等の大論の九種中果を果報の二となし、且つ達磨鬱多羅即ち法上が、法華の十如を會したとあるが、僧伝中法上伝には周の大象二年(五六〇)八十六歳を以て入寂とあれば、天台より稍先輩であつたが、十如と會したことが、法上の所為なるに就て何等これを知ることが出来ない。何れにもせよ法華の十如は大論の九種法に依れることは否めないものである。

併し乍ら大論中しばしば法華を引用するに依れば、九種が法華の十如に依つたことは想像し得るが、今論經の釈出に就て見るに、大論は羅什來秦の翌弘始四年より七年十二月に亘り、最初の訳場たる逍遙園に於て訳出せられた

ることは、論後の記（正藏二五_{六七}）に依て明かである。然るに僧叡の法華後序（正藏五_{七六}）に依れば法華の訳出は、聖弘始八年の夏であり且つ訳場は慧観の法華宗要序には長安大寺（全上）であり、更に僧肇伝に依れば此年西域より、数多の胡本が将来せられ常山公等の請に依て、訳場を逍遙園より大寺に移して訳出せられたる故に、羅什の法華経訳出は大論訳出の後である。且つ法華の十如に就て見るに、前訳の法護の正法華には十如に相当する文を「従何所来、諸法自然、分別法貌、衆相根本、知法自然」（正藏九_{六八}）等と五種法に寄せて訳し、更に後訳の法華論には「何等法、云何法、何似法、何相法、何体法、何等、云何、何似、何相、何体」（正藏二六_{二四}）と、正法華の五種法の反覆と見られるのである。邦訳の南条本の新訳法華経⁽⁴⁰⁾も亦同様である。されば正法華は法華論の反覆の分を略除して五種法と訳したのかも知れない。然るに法華論の九種法が若し当時の法華梵本に依て、深般若たる法華の諸法実相を訳されたものとするれば、羅什は大論の後法華訳出の時九種を更に整束して、相・性・体・力・作・因・縁・果・報・本末究竟等と訳されたのではなかるうか。果して然りとすれば浅般若たる般若の空諦実相に対して、深般若たる法華に正法華の五種法、乃至大論の九種の見る如く、実相義を一層積極的に説かれたることは、大論七二に般若に浅深を分ち、全百に法華を秘密法（正藏二五_{七五}）等と釈せるに依て明かである。これ天台の上述の中智傍正の論ある所以である。

かくて天台の実相義の極説たる一念三千の説は、上述の如き法華の十如と華嚴の十界と大論四八の能照_二一切世間三昧_一者、得_三此三昧_二故能照_三三種世間_一、衆生世間・住処世間・五衆世間。（正藏二五_{四二}）の所謂三種世間の文に依ることは、玄義二に心法妙を釈する下

遊心法界者、觀_三根塵相對一念心起_二必屬_一二界_一、若屬_三一界_二即具_一二百界千法_一、於_三一念中_二悉皆備足_一、此心幻師於_三二日夜_一、常造_三種々衆生・種々五陰・種々国土_一。（正藏三_{六六}）

等と十界・十如・三世間に約して、未だ三千の名を見ざるもその義を釈し、晚年止観を説くに當ってその第五に

夫一心具十法界、十法界又具十法界、百法界、一界具三十種世間、百法界即具三千種世間、此三千在一念心、若無心而已、介爾有心即具三千。亦不言一心在、前一切法在、後亦不言一切法在、前一心在、後。〔正藏四_{五四}〕
等と十界・三世間に約して一念三千の名を立てられたる如く、一念三千は十界・十如・三世間に依り、一念三千・三千一念の双具説をなしたのである。故に智涌の了然は「華嚴大論是死法門、法華十如是活法門」。〔正藏四_{六三}〕と、法華の十如に依て一千三千双具説の成立せることを讚歎せる如く、天台は法華の十如を以て二乗作仏の典拠とせる故に、了然は活法門と歎したのであるが、上述の如く三世間の外法華の十如が、大論の九種法に関連あるものとすれば、天台が龍樹を以て内鑑冷然の師と歎ずるは、これ当然のこと、いわなければならぬ。

九

次に天親に対する内鑑冷然に就ては、三大部中屢天親の法華論を引用するが、就中玄義七の蓮華釈の下には、先づ旧解として僧叡・慧遠の釈を引き、次に経論を引くの下天親の法華論の十七異名を挙げ、特に上掲第十六の妙法蓮華の釈を引き

今解論意、若言令衆生見淨妙法身者、此以妙因開發為蓮華也。若言入如来大衆坐蓮華上者、此以妙報国土為蓮華也。何者盧舍那仏如蓮華藏海、共大菩薩皆非生死人。若声聞得入於此、即妙報国土為蓮華也。彼論望今意乃是行位兩妙耳。〔正藏三_{二七}〕

等と蓮華を以て依報国土と解し、更に

今法華三昧無_レ以_レ爲_レ喩_レ。此蓮華_ニ耳。夫華有_ニ多種_ニ已如_ニ前說_ニ。唯此蓮華華法俱、多可_レ譬_下。因含_ニ萬行_ニ果_ニ田_ニ萬德_上、故以_レ爲_レ譬。又余華鹿喩_ニ九法界_十如因果_一、此華妙喩_ニ仏果界_十如因果_一。又以_ニ此華_一喩_ニ仏法界迹本_二阿門_一各有_ニ三喩_一。
(全上)

等と此經の迹門の廢三顯一、本門の廢迹顯本を爲蓮故華・華開蓮觀・華落蓮成の各三喩として此經題の蓮華釈をなし。又玄義十には南地の五時教を破する第二無相教の下、涅槃經二五師子吼品(正藏三九六)に仏性に首楞嚴三昧、般若波羅蜜等の五種名あるを、仏性と置換して「大經云仏性有五種名_一、乃至般若乃是仏性之異名」(正藏三八)となし、更に全經八の如來性品に「無二之性即是實性」(正藏三二)等の文に依り「實性之性即是仏性」(正藏三八)と説き、

法性実相是正因仏性、般若觀照即是了因仏性、五度功德資_ニ發般若_一即是縁因仏性、此三般若与_ニ涅槃_三仏性_一復何異耶。(全上)

等と涅槃經に依り三因仏性を説き、更に第四法華同歸教の難の下に、無量義經の「華嚴海空宣_ニ說菩薩歷劫修行_一乃至如是甚深無量義經」の文を引き

甚深無量義經已自甚深、甚深之經爲_ニ法華弄引_一豈不_レ明_レ常。乃至無量阿僧祇劫無量壽命常住不滅。伽耶城壽命及數々示現等、是応仏壽命阿僧祇。壽命無量者報仏壽命、常住不滅者是法仏壽命也。三仏宛然常住義足。(全上)

等と法華經の文に法華論の三種仏菩提の義ありとなし、

又云我不敢輕汝等、汝等皆当作仏即正因仏性。又云爲_レ令_ニ衆生開_ニ仏知見_一即了因仏性。又云仏種從縁起即縁因仏性。法華論亦明_ニ三種仏性_一、論云唯仏如來証_ニ大菩提_一、究竟滿_ニ足_一一切智慧_一故名_レ大。乃至又涅槃經二十五云、(正藏三七九)究竟畢竟者一切衆生所得一乘、一乘名爲_ニ仏性_一。(全上六)

等と法華論の三種仏菩提は三仏性の果と判じている。

更に文句四には方便品の開仏知見を釈するに当って、地論師の外有人として十一師の解を挙げ「如レ上諸師漫取二諸經中語一、都不レ見ニ法華大意」となし、最後に法華論の「一大事者依ニ四種義」と無上・同・不知・不退（正藏二六二七）の四義を開示悟入に配し、且つこれを二乘・菩薩・凡夫の三人に配せる文を引き、

論言次第、初開ニ仏知見一為ニ無上二、次示ニ三乘同有ニ仏性法身一、雖レ明ニ仏智無上二但恐ニ仏獨有二。故第二明ニ三乘同有ニ、雖ニ三乘同有ニ而ニ乘不レ悟示レ其令レ知、雖レ知而不レ得ニ不退一故第四令レ得ニ不退一。又一番約ニ菩薩開如レ前、示者諸菩薩有疑者、令レ知ニ如実ニ修行ニ故。悟者未レ發ニ菩提心一令レ發心ニ故。入者已發ニ菩提心一令レ入レ法故。第三番約ニ凡夫開如レ前。示者示ニ其有ニ法身仏性ニ故。悟者令レ外道衆生ニ覺悟ニ故。入者令レ入ニ大菩提ニ故。今師作ニ四解一不レ乖レ論。（正藏二五〇）

等と光宅の果・人・教・因の四一を、理・人・行・教の四一と改めて広開三顯一の四仏知見を釈し。又文句九の寿量品の下に於ては寿量の仏身を釈するに當って、僧叡・道朗・慧觀・劉虬・道生の法身説、並に光宅の神通延寿の仏身を応身説となし、後に法華論の十無上の第八の三種菩提の文、並に連文たる

我淨土不毀・而衆見燒尽者、報仏如来真實淨土、第一義諦之所攝故。（正藏二六二八）
等と説ける文に依り

論云示ニ現成大菩提無上ニ故、示ニ三種菩提一ニ応化菩提、二報仏菩提、三法仏菩提。乃至經具ニ其義ニ論出ニ其名一、不レ作ニ上釈一寧會ニ經論ニ耶。乃至此品詮量通明ニ三身一、若從ニ別意ニ正在ニ報身一。（正藏二四八三）

等と釈せる如き、玄文通じて論文に依れる釈に徴して、天親の内鑑冷然の意と解すべきであらう。

若し天台の三因仏性に就ては、上述の如く涅槃經師子吼品等に依り、玄義十の判教の下の外、玄義五の類通三法、（正藏三^四）並に文句九の寿量品の「多諸子息」の下（正藏二^{四三}）等に見え、従つて三因の名は師子吼品の

衆生仏性亦二種因、一者正因、二者緣因、正因者謂諸衆生、緣因者謂六波羅蜜、乃至緣因者即是了因、世尊譬闍中先有^三諸物、為^レ欲^レ見^レ故以^レ燈照^レ了^レ。（正藏三^三）

の文に依られたのであろうが、上述の如く宗祖が爾前二乗菩薩不作仏事に、「抑以^三何因緣^二說^三十界衆生悉有^三三因仏性^二」^二と説き、天親の仏性論を引いて之と証するに徴して、未だその典拠を明にしないが、全論三因品の「応得因具有^三三性^二、一住自性々、二引出性、三至得性」の義に依られとも解せられるのである。

十

要するに宗祖の天親・龍樹内鑑冷然の義は、佐後末法弘通の逆縁下種の一秘、乃至順縁熟脱の三秘の内相承、並に天台伝教の外相承の一念三千義に簡んで、天親・龍樹の弘通を内鑑冷然と判じられたものである。最後に然らば何故に龍樹・天親と次第せずして、逆に天親・龍樹と次第せるやに就ては、外相承の師たる天台は龍樹を以て今師相承には天台を高祖と仰ぎ、且つ大論の実相論に立脚するに相反するものである。併し三大部中に於ては上述の如く天親の法華論に負う所多い故に、法門の親疎に由来するとも解せられないではないか。恐らく漫然印度に於ける諸論師中天台義に親しき性相二宗の代表的論師として、天親・龍樹を挙げて天台の一念三千実相義に対する、内鑑冷然の師と推賞せられたものであらう。